

研究課題：国保特定健診事業への歯科検診の導入に関する研究（歯科疾患と全身の健康状態の関連および歯科保健指導による生活習慣病改善効果）

研究者名：研究者名：栗田 浩¹⁾、唐澤今人¹⁾、草深佑児¹⁾、田中 厚²⁾、永井明子³⁾
所属：¹⁾ 信州大学医学部歯科口腔外科学教室、²⁾ 長野県塩筑歯科医師会、³⁾ 長野県衛生部

【目的】本研究の目的は国保特定健診に成人歯科検診を試験的に導入し、①横断研究により歯科疾患および口腔の健康状態と生活習慣病との関連を検討、②3年間にわたる縦断的研究により歯科疾患の改善による生活習慣病の予防効果を検討するものである。今回、本研究の初年度（H26年）の横断的研究の概要を報告する。

【対象及び方法】対象は、塩尻市特定健診受診者（30歳～74歳、H26年度2716人）のうち歯科検診に同意を得られ（1057人）、歯科検診を受診した1031人である。「標準的な成人特定健診プログラム・保健指導マニュアル」（平成21年社団法人日本歯科医師会）に沿って歯科検診を行い、口腔の健康状態と生活習慣病に関連する各種健診結果との関連性について横断的に検討を行った。

【結果】男性においては年齢、身長、BMI、収縮期血圧、 γ GT、中性脂肪、HDLコレステロール、HbA1cにおいてCPITN3,4群がCTPIN0,1,2群に対し有意に高かった（Mann-Whitney-U検定、 $P<0.05$ ）。また、女性においては身長とHbA1cにおいて有意に高かった（ $P<0.05$ ）。CPITNスコアと各既往歴の間には有意な関連は認めなかった。CPITNスコアとメタボ判定結果の間に統計学的に有意には至らなかったものの、CPITNが高いほどメタボリックシンドロームに該当すると診断される傾向を認めた（spearmanの順位相関係数の検定：相関係数0.064、 $p=0.067$ ）。口腔衛生状態とメタボ判定結果の間には有意な相関関係を認め、口腔衛生状態が不良なほどメタボリックシンドロームに該当すると診断されていた（Spearmanの順位相関係数の検定：係数0.0783、 $p<0.05$ ）。

【まとめ】今回H26年度塩尻市特定健診に歯科検診を試験的に導入した1年目の結果について報告した。本研究は横断研究であり正確な因果関係を説明することは困難であるが、口腔の健康状態は全身の各検査項目と相関性を認め、特に男性で高かった。これに続く2年間の縦断研究においても同様の介入を行い、全身の各検査項目と歯科検診項目について検討をすすめ、歯科検診、歯科保健指導がメタボリックシンドローム予防、生活習慣病の防止、しいては国民医療費の削減に効果があるかどうかの検討を継続して行っていく予定である。